『週刊 NHK ラジオ新聞』
～情報雑誌の先駆者～

メディア研究部（メディア史）宮川大介

はじめに

各放送局の放送予定番組の内容を詳しく紹介してくれる番組情報誌は便利な存在である。60年前，放送と言えばNHKのラジオだけだった頃にも，同じように番組情報を提供する出版物があったことを御存知だろうか。

「放送史料 探訪」4回目は，番組情報誌の先駆けとも言える『週刊NHKラジオ新聞』を取り上げる。

創刊は1950（昭和25）年1月1日で，日本放送出版協会が発行し，日本放送協会が監修していた。タブロイド判と呼ばれる大きさの新聞である。

封書が8円，ハガキが2円，コーヒー1杯が30円の時代に10円の定価で売られていた。早くも1年半後の1951年7月7日発行の第80号から15円に値上げされている。

当時の「NHK普及部」が作成した部外秘資料によると，創刊号は販売促進用の無料配布分を含めて12万部発行された。13号までの発行部数は平均すると10万3,000部で，当時の全国の聴取者およそ900万人に対する割合は1.2％と記録されている。

創刊の目的

創刊号は合わせて12ページ，1面には，若い女性と幼い女の子が，放送会館の玄関先で寄り添った写真が掲載されている。

写真説明によると「ラジオと皆さんをつなぐ一九五〇年の可愛いマスコット二人――放送劇団の加藤道子さんと“鐘の鳴る丘”のみどりちゃんが，向かいのビルにひるがえる日の丸ににっこりしたところをパチリ……まず明けましておめでとう」とある。いかにも時代を感じさせるコメントである。

週刊NHKラジオ新聞
NHK RADIO WEEKLY
1月1日・第1号
創刊号
耳と目を結ぶ
RADIO TOKYO

現在でも出版物の表紙は，その出版物の顔である。まずは1面の写真で読者，聴取者の興味を引きつけようという意図であろう。ちなみに，夏には水着姿の女性が1面を華々しく飾った号も登場した。

写真の左には「創刊の言葉」が掲載されている。タイトルは「耳と目を結ぶ」。文章を書いた日本放送出版協会社長の奥屋熊郎は，大阪中央放送局の文芸課長だった1936（昭和11）年当時，『国民歌謡』を発案したことでも知られる草創期のラジオ史を語る上で欠くことのできない人物の1人である。

「創刊の言葉」の中で奥屋は，ラジオには

聞き逃したが最後，呼び戻しが利かないという“欠陥”があると指摘し，この欠陥を補う方法について「聴取者の視覚を動員することです。声と音とだけを頼りにしていた聴取者に，新たに眼で見る素材を提供することです」と述べている。

「印刷物によつて，一切の放送計画を懇切に説明し，声の主を写真に，歌の旋律を曲譜に，そして，何が番組の重点か，どこが名曲の聴きどころか，どれが名手の至芸かを挙げ番組に付随するゴシップやニュースも載せ，さらに聴き残した話やメモの断片までが再録されるというような定期刊行物が常に聴取者の皆さんの座右に届けられるなら，日々のラジオは，どんなに楽しく親しいものになりましょう」と，出版目的を説明している。

また「英国放送協会（ＢＢＣ）の週刊雑誌『ラジオ・タイムス』にも負けないほどの強力な新聞に育てあげたいものと存じます」という言葉も見える。発刊の背景にＢＢＣの週刊雑誌の存在があったことは想像に難くない。

昭和 25 年のラジオ

『20世紀放送史』（2001年・日本放送協会発行）によると，1950年は放送開始から25年，放送法の成立によってNHKが公共企業体として生まれ変わった年でもある。

「終戦からちょうど4年後の1949年8月15日，NHKは有料聴取契約者800万を達成した。（中略）受信者が増えることはNHKが“国民のラジオ”として再生しつつあることの1つのあかしでもあった」

しかし，NHKを取り巻く社会的・経済的情勢は，戦後の悪性インフレを抑えるために実施された財政金融引き締め政策の影響で，必ずしも楽観できるものではなかった。

経営基盤を強化する必要に迫られたNHKは，放送法施行の翌月に当たる1950年7月から「みんなでラジオをききましょう」全国普及運動を開始している。

3年後の1953年2月にはテレビの本放送開始という大転換点も迫っていた。逆の見方をすれば，この時期のラジオはまさに絶頂期にあったのである。

年度	年度末契約数	年度内増減数
1944	747 万 3,688	12 万 6,759
1945	572 万 8,076	△ 174 万 5,612
1946	570 万 5,468	△ 2 万 2,608
1947	644 万 3,206	73 万 7,738
1948	759 万 2,625	114 万 9,419
1949	865 万 0,037	105 万 7,412
1950	919 万 2,934	54 万 2,897
1951	971 万 2,015	51 万 9,081
1952	1,053 万 9,593	82 万 7,578

ラジオ放送受信契約数の推移（『20 世紀放送史』より）

終戦から5年足らず，日本の社会はまだまだ騒然としていて，海外でも6月に北朝鮮軍が38度線を越えて韓国に侵攻した。『週刊NHKラジオ新聞』は，このような時代背景の中で創刊された。

聴取者のために

創刊号の中身を少し紹介する。2面と3面には，「今週の番組」として，1月1日から7日までの1週間の番組予定が紹介されている。

1日（元日）の第1放送の冒頭は，午前5時35分から「お早う番組　鶏鳴随筆＝長與善郎　詩と音楽　詩朗読＝村瀬幸子」，続いて6時30分から「各地の元旦，釧路岬，湯沢，大洗海岸，二見カ浦，道後温泉，阿蘇山各地よりリレー放送」と書かれている。

もちろん，第2放送についても同様に，放送開始時間と番組の内容，出演者などの情報が簡単に紹介されている。

主な番組については，それぞれに詳しい解説を載せている。2日午後7時から放送される毎年恒例の『歌と軽音楽大会』について，「ことしは伊藤久男，灰田勝彦，渡辺はま子，笠置シズ子，田端義夫，二葉あき子，霧島昇など一流歌手がズラリと並んで初春を大いに歌いまくる」と書き，曲目の一部も紹介している。

「創刊の言葉」に触れられた「歌の旋律を曲譜に」という約束も守られている。『ラジオ歌謡』の楽譜や『日曜娯楽版』のテーマソングの楽譜が紙面に掲載されている。

番組の案内や説明ばかりではない。ラジオの放送内容には余り関係ないのではないかと思われる記事もある。

「お淋しい正月映画」というコラムは「お正月の映画にはたいしたものがない。年に一度か二度しか映画を見ない階級を対象に低い番組を組むからである」と映画興行界に対する痛烈な批判で始まる。『霧の波止場』，『若草物語』，『腰抜け二挺拳銃』の洋画3本のロードショー映画を取り上げて内容を概観し，そのほかは，日本映画を含めてほとんど見るべきものなしとバッサリと切り捨てている。

また，堅い記事もある。「欧州からアジアへ　一九五〇年の世界展望」と題したNHK解説課員による署名入りの記事が載せられている。

前年（1949年）10月の中華人民共和国の成立は大事件であると解説課員は述べ，中共の東南アジアへの進出問題を憂慮する西ヨーロッパ諸国やアメリカは，インドのネール首相やインドネシアのハッタ氏などと共にアジアの反共態勢を次第に作り上げていくであろうと分析している。

そして「世界の政治経済外交の舞台は，大きくアジアに移ってきた。二大陣営の対立がアジアにどんな結果を産みだすか。わが日本がこの影響の外にいることは，好むと好まざるとにかかわらず不可能なことだ」と結んでいる。国際情勢を冷静に見据えた硬派の記事がしっかりとした存在感を見せている。

『週刊NHKラジオ新聞』は，実にさまざまな分野の記事を満載していたのである。

有名漫画家の若き日の姿

少々驚きの発見もある。1月14日発行の第3号に「次号より連載漫画…歌野ケイ子さん　新鋭ヤナセタカシ氏の力作」との紹介記事がある。

記事には「ヤナセ氏は，朝日新聞の懸賞募集に入選し，これまで多数の雑誌に執筆，人気を博している新進気鋭の漫画家です」と紹介されている。

ヤナセタカシ氏の漫画は，6月3日付の第23号まで20回にわたり連載された。のちに「アンパンマン」の生みの親として日本中の子どもたちに知られ，90歳を超えてもなお現役の漫画家として活躍している，やなせたかし氏の若き日の仕事である。

登場人物の名前を見ると，弟の「エヌ坊」，隣の「H君」，そして主人公の歌野ケイ子さん，この3人の名前を並べると「NHK」となる。今も昔も変わらぬ，やなせたかし氏のサービス精神の表れなのかもしれない。

「サザエさん」 NHKで放送

2月18日発行，第8号の5面に，「日曜娯楽版にサザエさん　作者町子さんも登場か」という見出しで番組が紹介されている。

続いて3月4日発行，第10号の3面に，「市川三郎氏の脚色で『サザエさん』－日曜名物娯楽版－5日後9：00　第1」という記事が見られる。

日曜娯楽版にサザエさん

三月五日 作者町子さんも登場か

今度NHKの日曜娯楽版に「サザエさん」がとり上げられることになった。昔になる漫画というねらいで娯楽版作家の市川三郎氏が脚色を担当し、三月五日の娯楽版にサザエさん一家が初登場する。「サザエさん」は作者が九州に疎開していたころ、海辺にねそべつて主人公の名前のサザエさんとその一家を思いついたのだそうだが「早く止めるつもりで結婚させた」という長谷川町子さんの最初の意図に反して、単行本四集の後夕刊朝日新聞の発刊以来連載されていよいよ好評である。

未婚のサザエさんをもつと活躍させたかつたとは作者町子さんの言葉だが、今さら離婚させることも出来ないからと、市川氏も結婚後のサザエさんをとり上げるという。

町子さん自身、脚本いかんによつてはプロットなら放送に出てもいゝ、ということなので市川三郎氏、脚によりをかけて町子さんの出てくれる脚本の考えを練つているとかなお、娯楽版サザエさんの役には放送劇団の七尾伶子が第一候補に上つている。【写真が町子さん】

そのものである。日本歌謡のなほんとうの笑いとはどこか遠

NHK放送博物館に保存されている『日曜娯楽版』の台本を確認してみると，3月5日には「サザエさん」は放送されたようだが，長谷川町子氏がその番組に出演したかどうかまでは確証を得ることはできなかった。

芸能人との関わり

『週刊NHKラジオ新聞』には，あの永遠の大スター，美空ひばりや淡島千景，森繁久彌など，数々の芸能人が写真入りで頻繁に紙面に登場する。中には封切りが近い映画の宣伝をしている場合もある。

現在のテレビ情報誌にAKB48やジャニーズ事務所のタレントが登場するのと同じ理屈が働いている。聴取者の増加を図りたい情報誌と知名度を上げたい芸能事務所双方の切っても切れない縁がすでに見えている。

番組情報誌の先駆け

その後の『週刊NHKラジオ新聞』は，どうなったか。テレビ本放送が始まった直後の1955（昭和30）年には『NHK新聞』と名を変え，続いて1960（昭和35）年には『グラフNHK』と名称を変更している。番組情報を出版物で伝えるという手法は連綿と続き，現在の『ステラ』（NHKサービスセンター発行）につながっている。

現在，テレビやラジオ番組の情報を提供している出版物は『TVガイド』や『週刊ザテレビジョン』，さらには月刊誌も含めると百花繚乱状態である。これらの情報誌に共通するのは言うまでもなく，番組関連情報をいかにたくさん提供するかということである。

番組情報誌の先駆け的存在である『週刊NHKラジオ新聞』は，ラジオを聴いてくれる人々に向けた情報を送り出すことに実にさまざまな工夫を凝らしている。読めば読むほどいろいろなことに実験的に挑戦している姿勢には頭が下がる。

それと同時に，昭和25年という時代背景のせいかもしれないが，規制とか抗議などといったタブーをそれほど気にしていないような，何やらのびのびとした空気をも感じてしまうのである。

（みやがわ だいすけ）